8番目の罪

高宮らいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
８番目の罪

【Ｎコード】
Ｎ０２３４Ｘ

【作者名】
高宮らいな

【あらすじ】
ホムンクルスとして生まれたカミヤ・アリア。自分が失敗作ということを知り、守られた世界を出る決意をする。文献でしか知らない世界に触れて、アリアは大切なものを見つけていく。
Ｒ１５と残酷な描写設定は現在はありませんが、これから可能性があるかと思い付けてます。
某漫画のパラレル物として発行した小説をベースに、オリジナル

としてリメイクしました。

1，はじまり

公害や幾度となく行われた戦争により、世界は汚れてしまった。オゾン層は破壊され地上に有毒な紫外線が直接降り注ぐようになり、大気は汚染された。人々は紫外線遮断機能や空気清浄機能が付いたドームの中でしか生きられなくなっていた。

現在ドームの数は１０個。すべてが独立した都市国家を形成し、昔の言葉から名前が付けられている。

ドームの周囲には、ドーム形成以前に造られた建物…今となってはほとんど廃墟となった街が解体されずに放置されていた。噂では、危険な廃棄物も処理されぬままにされている場所があるらしい。

そんな場所にも、人は生きていた。

ドームに入れなかった者、ドームで罪を犯し刑罰として追い出された者、自らの意思でドーム出た者などが都市周辺に街を形成し生活を送っていた。

多種多様な人種が集まり、時間の経過とともにドームの人間と比べてはっきりとした体質の変化が認められた。初期の住人たちの寿命はとても短かいものであったが、汚染した地域で生活しているうちに耐性が付き、今ではさほど短くはない寿命となっていた。

それらはやがて『スラム』と呼ばれるようになった。

例えばドーム・ファラクを中心に東西南北に４つの地域に分かれ…

「……ヤ、カミヤ」

肩をたたかれて少女は振り返った。視線の先には白衣姿の青年が苦笑を浮かべて立っていた。

「また読書に夢中になっていたね。今何時だと思っている？」

青年の言葉に少女はパソコンモニターの下に表示されている時計を見た。彼女がこの部屋に入ってからゆうに６時間以上も経過して

いた。
「勉強熱心なのもいいけど、自分の身体も考えなさい。もう夕食の時間だよ。一緒に食べに行こうか」
青年の言葉に少女は頷いたが、すぐに首を振った。
「こんなに遅くなるつもりはなかったから、プロフェッサー・クドウに聞かないと」
「大丈夫。クドウも一緒だから」
「本当？」
「ああ。ちょうど会議も終わって帰るところだったのさ。廊下で待ってるから早く帰り支度をしてきなさい」
「うん」
少女は青年の言葉にうなずいて、パソコンに向いなおした。
少女の名前は、カミヤ・アリア。腰まである黒髪と黒い瞳を持ち、頬のそばかすのせいか１７歳という年齢よりは若干幼い印象をもたれる外見をしていた。
先ほど話しかけてきた青年はヤジマ・トシキといい、アリアの保護者であるプロフェッサー・クドウの研究所のドクターとして働いていた。年齢は２６歳。ウルフカットにされた黒髪と黒い瞳をしている。余計なことだが、ヤジマはアリアを溺愛していた。
そして、廊下で待っているのがプロフェッサー・クドウ。フルネームはクドウ・ヨシハル。柔らかい印象を与える焦げ茶色の髪と瞳を持ち、２６歳という若さでありながらドーム・ファラクに属するトップクラスの研究員であった。アリアの保護者であるが二人の血は繋がっておらず、成人までの後見人として彼女と暮らしていた。
パソコンの電源を落として、アリアは急いで廊下に向った。
「あれ、プロフェッサー・クドウは？」
「急な仕事が入ったって、研究室にもどったよ」
「そうか…仕事なら仕方ないよね」
視線を外して苦笑を浮かべるアリアの頭を、ヤジマがくしゃくしゃと撫でる。

「もー、落ち込んじゃって。俺じゃあ満足させられないのねぇ」
「その、えっと、最近プロフェッサー・クドウと話せてなかったから残念だなって…。ドクター・ヤジマが嫌なんじゃないのよ」
「わかってる、わかっているよ。ほらほら、ご飯食べに行こう」
アリアの頭をもう一度撫でて歩き出した。
プロフェッサー・クドウが彼らの約束より仕事を優先するようになったのは、最近は当たり前になっていた。

2，医務室にて

翌朝、ヤジマはクドウに会いに研究室に向かうも彼の姿を見つけることができず、言伝を残して医務室へ戻ることにした。

しばらくして、徹夜明けの赤い目をしたクドウが医務室に現れた。

「また徹夜か？お前さぁ、いつまでも自分が若いと思うなよ？適度に睡眠と休息取らないと、超人的なお前でもいつか倒れるぞ」

そう言いながらコーヒーを渡す。

「ありがとう、ヤジマ。でも、どうしても、やらなきゃいけないことがあるんだ。休んでいたら、間に合わなくなる」

「何やってるか知らないけど、達成する前に倒れたら意味ないだろ。それに、さ」

ヤジマは一度言葉を切って、クドウを見つめる。

「最近どうかしてるぞ、お前。あんなに溺愛していたアリアを突き放して、いったい何をしているんだ」

「突き放す？まさか」

クドウは大げさに肩をすくめる。

「『K-A』（ケイーエイ）は唯一の成功体だよ。大事に決まっている」

クドウの言葉にヤジマは不機嫌な表情をつくる。

「その『K-A』って呼び方やめろって言わなかったっけ。名前を呼べよ」

「呼んでいるだろ」

「俺以外の前でね」

「それは『K-A』が本当の名前だからだよ。どんな名前で呼ぼうとも、彼女の本質は変わらない」

「ああ、そうですか。凡人の俺様には理解できないお話でした。飲み終わったらカップはそのまま置いといてくれ。ちょっと、出てくるから」

そういって、ヤジマはクドウを残して医務室を出て行った。

2，医務室にて（後書き）

話の都合、短いお話になりました。
読んでいただきありがとうございます。

3，隠された計画『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』

アリアは最近のクドウの様子を気になっていた。研究に熱中して寝食を忘れるような姿は珍しくもなかったが、今回の彼の態度は異常としか言いようがなかった。部屋に帰ることも連絡が来ることも少なくなり、徹夜やアリアの約束のキャンセルが当たり前となっていた。

クドウの研究に助手として参加することもあるアリアだが、今回は参加はおろか研究内容についても知らされてはいなかった。会話を交わすことが少なくなり、彼女の中に漠然とした不安が広がっていた。

「本当は、直接聞かなきゃいけないってわかってるわ。でも…」

アリアは小さくため息をついた。

研究室に入れないアリアは、図書館―（といっても紙媒体の本があるわけではなく、小さなブース分けた場所にパソコンが設置されている）にむかった。誰も図書館にいないことを確認し、人目に付きにくいブースを選んで座った。パソコンの前で瞳を閉じて神経を集中させる。

ゆっくりと瞳を開けたアリアに感情の色は消え、無機的な瞳のまま形の良い指をキーボードに滑らせた。

ドーム・ファラクには多くの研究者がいた。研究内容は科学、文学、社会、経済、医学…多種多様幅広い分野にわたって研究が行われている。

アリアの後見人となっているクドウも研究員の一人であった。いや、後見人というのは表向きの関係だった。

クドウは遺伝子を扱う研究を行っていた。病気の解明と治療についての分野を中心に研究しているという扱いであったが、実際には世界的にも禁忌とされている人工的に人間を創る研究を行なってい

た。遺伝子を操作し人工子宮体の中から生まれる人工的な生命、いわゆる人造人間（ホムンクルス）を創る研究だった。
そして、最初の成功体がアリアだった。
多くの失敗を繰り返し、アリアはこの世界に誕生した。普段は長袖に隠れているアリアの左手首の内側には『K‐A』という印が付いていた。Kは11番目に創られたこと、Aは1体目を表していた。それは、最初の成功例を意味する識別番号（シリアルナンバー）だった。アリアより前の10体は人工子宮体の中での生育段階で失敗し、この世には存在していなかった。
外見は16歳のアリアだが、生まれてからまだ3年しか経っていなかった。ガラスケースと呼ばれている人工子宮体の中で、1年をかけて心身ともに15歳まで成長させ、そこから出てクドウの元で普通に年を重ねてきたのだ。
アリアがホムンクルスであることは、クドウ直属の研究スタッフと専属医師であるヤジマだけが知っていた。他のスタッフには優秀な頭脳を持つ遠縁の親戚を引き取られ、研究の手伝いとしていることになっている。
ここのメインコンピューターには、誰が何の研究を行っているのかが全て記録されるようになっているが、ある程度ロックがかかっていて他人の情報を覗けない仕組みになっていた。もちろん、クドウの研究はトップシークレットのため、概要すら隠されている。
アリアはメインコンピューターに侵入した形跡を残さずに情報を引き出す技術を持っていた。その能力のおかげで、奥深くに隠されたクドウの研究内容を見つけることができた。
不意にアリアの指が止まり、感情が消えていたはずの瞳に怯えが浮かぶ。
『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』
複雑な図とともに数式が並ぶ。その隣には『Ｋ‐Ａ』一つまりア

リア自身一の発育データーが展開されていた。そして、見たことがない数式とデーターが追加されている。
クドウが取り掛かっている研究は、新しいホムンクルスを創ることだった。
クドウは完璧を求める性格であった。それは他人から見れば傲慢とも受け止められない短所であるはずが、彼はそれをうまくオブラートに包み、逆に相手に憧憬の念を抱かせた。
そのクドウが2体目を創るということだけで、アリアは自分が失敗作なのだと確信する。もし、このデーターが自分(男の子)とは反対の性別であれば無理矢理納得することもできたが、現実は違っていた。自分が彼の理想どうりに成長していれば、同性(女の子)のホムンクルスを作る必要がないはずだ。
次を創るのは失敗したからなのだ。
アリアはいつもクドウのためだけに努力をしていた。知識を増やしていたのは、彼の研究を手伝いたかったから、認めてもらいたかったから。だが、その努力も無駄となった。

失敗作だったから、愛してくれなくなってしまったんだ。

漠然とした不安がはっきりとした形に変わる。それらがアリアを襲い、彼女の頭の中は真っ白になった。
どうやってパソコンを処理し部屋を出たのか覚えていないが、気が付いたら廊下に立っていた。次の瞬間、胃の中のものが逆流してくるような感覚に襲われ、近くの壁に寄りかかった。
「アリア、どうしたんだ、アリアっ」
聞きなれた声が、遠退きかけた意識を引き上げる。顔を上げると焦ったような表情のヤジマが見えた。
「ドクター…、どうしよう、私…」
そういうと、ヤジマの腕の中でアリアは意識を失った。

3，隠された計画『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』（後書き）

ホムンクルスの作り方とか成長の仕方とか、私が無い知恵を振り絞って考えた設定です。ファンタジーだと思って流していただければ幸いです。

4，愛されていた記憶

自分は夢を見ているのだろうか。アリアは首をかしげた。
彼女の視線の先には、ガラスケースにはいっている自分とクドウがいた。二人にはアリアの姿は見えていないようだった。
「おはよう、『K‐A』。うーん、この呼び方って味気ないね。だから、名前を考えてきたんだ。今日から君は『アリア』だよ。感情豊かに溢れるように素敵になってほしいって考えたんだ。どうかな。気に入ってくれたかな」
クドウはガラスケースのアリアに話しかける。時々目を覚ます彼女に彼はいつも優しく話しかけ、識別番号（シリアルナンバー）の『K‐A』ではなく特別な名前を与えた。

急に場面は変わり、次にあらわれたのはクドウと同じ場所にたっている自分が見えた。
ガラスケースを出てすぐにクドウと暮らしはじめた。初めての共同生活にいろんなことが起きて楽しい日々を送っていた。
「こんな風に大切に愛されていたことは過去になってしまったんだ」
彼らを見ていたアリアが呟くと、場面が変わった。

「はい、あげる」
アリアの前に小さな箱が差し出された。
「開けていい？」
「もちろん」
「…ペンダント？」
小さな箱から出てきたのは、赤い石が付いたペンダントだった。
「今日は1年前にアリアがガラスケースから出た日なんだよ。だから、お祝い」

「ありがとう。でも、こういうの無くしそう。うん、なくすと思うわ」
「おまえねぇ。こういう時はもっと喜びなさい。男は泣くぞ」
「あ、ピアスっていうのに変えていい？」
「人の話を聞きなさい、アリア」
「うー、ごめんなさい」
上目使いでアリアが謝ると、クドウは苦笑しながら彼女の頭を撫でた。そして、そのまま手をずらして彼女の耳に触れる。
「わかればよろしい。で、ピアスにするのか。耳たぶに穴をあけるんだから痛いぞ」
「無くすよりはマシだと思う。だって、ヨシハルが私にくれたものだもの。大事にしたいわ」
「そうか。きっと君の黒い髪とよく合うだろうね」
そういって、クドウは優しく微笑んだ。

「過去になってしまったけれど、この一瞬は本当に愛されていたと信じている」
幸せな場面を見つめてアリアが呟く。彼女の視線の先では、クドウが優しく微笑みながらアリアを抱きしめていた。
「大切だから無くしたくないって思うのは、俺も一緒だよ。これからアリアに辛い思いをさせることもあるかもしれない。だけど、ひとつだけ忘れないで。俺はいつまでもアリアが一番大切だからね」
ゆっくりと周りの景色が薄くなっていく。目の前が真っ白になって、アリアは自分が夢から覚めるような感じをうけた。

5，見えない真実

「精神的ダメージからくる発熱…っと」
ヤジマはアリアの状態を電子カルテに書き込み、思いっきりエンターキーをたたいた。
「誰だよアリアをこんな状態にさせた奴は…って、まぁ、ヨシハルしかいなんだけどさ。でも、こんな風になったアリアをみたことないっての。いったい何しやがった」
廊下で倒れかけた彼女を医務室に運び、クドウに連絡をしたのだが結局つながらないままだった。

うん、と寝返りを打ったアリアがゆっくりと瞳を開ける。
「大丈夫かい」
優しく話しかけるもアリアは現状が把握できず、不思議そうにヤジマを見つめ返した。
「図書館の前の廊下で倒れたんだよ」
「あ…」
そういわれて、アリアは新しいプロジェクトを見つけたことを思い出した。ゆっくりと上半身をおこし、アリアはヤジマを見つめた。
「プロフェッサー・クドウは新しいホムンクルスを創っているわ」
アリアの言葉にヤジマは言葉を失った。今回のクドウのプロジェクトに彼は組み込まれていなかった。とはいえ、クドウの専属チームのドクターではあったがいつも参加しているわけではなかったので、気にしてはいなかった。しかし、まさかそんな計画が立っていたとは。確かに、ヤジマはアリアに対して実験体と医師という関係以上の感情を抱いており、新しくホムンクルスを創るプロジェクトに対して否定的な態度をとることは明白だっただろう。だから、外されたのだ。
「ねぇ、私は失敗作なの？私はプロフェッサー・クドウの期待ど

うりに育っていないの？どうしたら、期待に応えられるの？どうしたら、私の居場所を…」
最後は言葉にならずに、アリアは唇を噛んで下を向いた。
「クドウの考えていることは、俺にも正直わからない。だけど、きっと…」
慰めようにも言葉が続かない。クドウは冷静で時に冷酷な一面があり、目的のためなら手段は選ばないことを二人は知っていた。

アリアが落ち着くまで待ってから自室に送り届けた。クドウが帰宅していなかったので、彼女を一人にするのには不安があったが、大丈夫だと押し切られてしまっていた。

ひとり医務室に戻る間、ヤジマはいままでの状況を整理する。
クドウの態度が変化したのは、半年くらい前。何かのプロジェクトを立ち上げたのだと思い気にしていなかった。実際は新しいホムンクルスを創っているということはわかった。しかし、アリアはガラスケースから出て2年しか経ってはいなかった。それだけで次のホムンクルスを創るには、データー不十分で意味がないことだと考える。
きっと、クドウは何かを隠している。これだけは、気付いていた。溺愛しているアリアを遠ざけるも、思い詰めたような表情で彼女を見つめているときがあるのだ。それは、たぶんクドウ自身も気付いていないだろう。
しかし、何を隠しているのかまではヤジマにはわからないままだった。

6，クドウとヤジマの出会い

ヤジマとクドウは大学生の時に出会った。お互い自分とは関係ない分野で出席者もすくない授業で会話をしたのがきかっけだった。時々授業以外でも会うようになり、親しくなってからヤジマはクドウがすでに自分の研究室を持っていることを知った。

「ヨシハルって、結構すごい奴だったんだな」

「いまさら言われるとは思わなかった。ほんとに俺のこと知らないの？」

「知らないのって、そんなに有名なのかよ」

不思議そうに返すヤジマにクドウは苦笑を浮かべる。

「大学は１０歳で卒業、博士号を取りながら院生として在学しているんだ。研究所を開設した時とか、自分で言うのもなんだけどすごかったよ？」

その言葉に、ヤジマは肩をすくめた。

「自分の周りに興味がなかったからな。でも、そんな有名な奴がなんで俺なんかと親しくするんだ？俺のこと親切な奴が教えてくれなかった？ヨシハルほどじゃないけど、俺もちょっとは有名だと思うぜ？」

ドーム・ファラクの権力者であるヤジマソウシは夫人との間に子供に恵まれなかった。それが、数年前に跡取りとして遠縁の子供を引き取ることになった。遠縁という割にはヤジマソウシの若い頃によくにているといわれ、愛人の子ではないかと噂された。

ヤジマの跡取りということで近づいてくるものも多く、そんな相手を適当にあしらいながら、彼は一人で過ごすことが多かった。

「ああ、そんなことも言われた気がする。でも、トシキは俺に対して普通だし、面白いし、退屈させないし、気にしてないさ」

「お前ね…」

「このクドウヨシハルが認めたんだ、感動したまえ」

そう言って、両手を広げる。
「バカじゃね、お前」
大げさに溜息をつく。目があってさらに二人で笑った。
笑いが収まった頃、クドウは真剣な表情をする。
「トシキを認めているのは本当だよ。だから、医師資格を取ったら俺の研究室に来てほしい」
「ヨシハルの研究室に？遺伝子なんとかってやつだろ？俺の専門外だ」
「研究員ではなく研究室の専属ドクターとして来てほしいんだ。たぶん、これから必要になってくる。その時に、トシキのような好い加減な性格のドクターがいれば…」
「いやいや、今褒めてなかったよ？むしろ貶めてたよ？」
「駄目かな」
そう言われて、ヤジマは即答できない自分に戸惑っていた。ヤジマソウシは自分が後を継ぐことを望んでいた。医学部の単位を取っていられるのも、後を継ぐのに必要な単位をすべて満たしているからだ。だから、医師免許を取得しても医師としては働けないことはわかっていた。
「わかった。ただし、ヤジマソウシを説得できたらな」
「それなら大丈夫。このクドウがスカウトしてきたんだ。断れるはずがない」
その言葉どうり、ヤジマソウジは簡単にクドウの申出を受け入れた。
大事な跡取りなんだが、是非にというのなら仕方ない…などと言いながらも、彼の頭の中はクドウと繋がりができることで生まれる利益についての計算でいっぱいだった。
そんな養父をよそにヤジマは最短で単位を取得し医師免許を取得し、クドウの研究室付の医務室へと就職した。
最初は経験を積むために病院中心で働き、経験が身についてきた

ころに医務室中心の生活に変更した。この頃に初めてクドウ直属のチームの専任のドクターとしてプロジェクトに組み込まれ、プロジェクトの内容を他言しないよう誓約書まで書かされ、通された研究所の中でガラスケースに眠るアリア…ホムンクルスを紹介された。

ホムンクルスの成長に伴い精神的、心理的、身体的に負担がかかると予測し、それらのサポートと、禁忌の研究の産物だということを周囲に気づかれないようフォローすることが仕事だった。

しかし、ガラスケースから出たアリアは想像以上に適応能力が高かった。いつの間にか研究員の中に溶け込み可愛がられており、研究所だけでなく学校に登校するようになってからは、見かけで弱いと判断されて喧嘩をうってきた相手を返り討ちにすることは少なくもなかった。返り討ちの方法は討論であったり、腕力であったり様々で別の意味でクドウ達を悩ませていた。

とはいえ、クドウがアリアを疎んじていることもなく、むしろ溺愛しているように周囲の目には映っていた。ヤジマの目から見てもそうみえたのだから、間違いはなかった。

7，欠陥

クドウの研究室の電話が鳴る。
研究室の中にはクドウだけだった。ちらりと電話に視線を向けるも、すぐにモニターに戻した。しかし呼び出し音も止まらなかった。しばらく鳴り続ける電子音に、クドウは舌打ちをしながら通話ボタンを押した。
「やっぱり、いたな」
不機嫌そうな声が聞こえてくる。
「お前からだと思ったよ、ヤジマ」
穏やかに返すクドウに、一言だけ返す。
「『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』」
ヤジマの言葉に一瞬だけクドウが息を止めるも、すぐにいつもと同じような態度に戻った。
「…ああ、アリアから聞いたのか。研究のデータフォルダーにわかり難いように細工された痕跡があったからね。彼女だと思っていたよ」
「ショックを受けていたぞ」
「そうだね。新しいホムンクルスが誕生するんだからね」
「…クドウ、本気で創っているのか？」
「ああ、『Ｋ－Ａ』には致命的な欠陥があるんだ」
「致命的な欠陥って、なんなんだよ」
「ヤジマ、電話口で叫ぶな、耳が痛い。欠陥の内容については俺だけしか知らないし、データーとしては存在していない。俺だけ知っていればいい。どうしても、それを改良するために次のホムンクルスが必要なんだよ」
「アリアとの時間を愛情を減らしてまで必要なのか。お前は彼女が大事じゃないのか」
「当たり前じゃないか、大事に決まっている」

「ふざけるな」
淡々と返されるクドウの言葉に我慢できなくなったヤジマは、一言だけ言って電話を切った。通信が切れた音に、クドウは苦笑を浮かべる。
「この計画は必要なんだ、どうしても」
クドウの追い詰められたような呟きは、ヤジマには届かなかった。

8，予測できない事故

アリアからクドウに『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』のことを訊ねられずに３か月が過ぎた。

研究室では表面的には何も変わらない日々を繰り返し、相変わらずクドウは研究に没頭し、アリアは図書館にこもることが多くなっていた。しかし、彼らの関係がおかしくなっていることを誰も気がついてはいなかった。

久し振りにアリアが一般研究室によると、いつも以上に部屋の中が慌ただしかった。

「どうしたの」

「ちょっとした手違いで、試薬が足らないんだ。ドーム・ラーストまで直接手渡しで受け取らなきゃいけない試薬なんだけど、誰も行けそうにないんだ」

「…私が行っても大丈夫かな」

「アリアが」

「うん」

「できればお願いしたいけどさ、プロフェッサー・クドウが了解してくれるかな」

「聞いてくる」

そういって、アリアはクドウの研究室へと向かった。

研究室に行く途中で、ヤジマとすれ違う。クドウに会いに行くことを告げると、彼は会議で明日まで帰らないことを教えられる。

「ドーム・ラーストに試薬を取りに行かせてもらえないかって、聞こうと思ったの」

「アリアが？」

「ええ。一般研究室で足りないけど、誰も取りに行けなくて困ってるってきいたから、一人で行ってこようとおもって」

「ドーム・ラーストはここから一番近いドームだけどさ、エア・カーで3日間かかるんだぞ。他にも暇な奴はいるんだから、アリアが行く必要はないよ」
「エア・カーの免許なら持っているし。それに、行き場所を登録していたら、ほとんど無人操縦で大丈夫でしょ」
「そうはいっても…。よし、俺も行く。アリアと一緒にドーム・ラーストに行く」
相変わらずのヤジマの反応に、アリアは苦笑を浮かべる。
「ドクター・ヤジマはお仕事があるでしょ」
「アリアと一緒にいる以上の仕事はない」
「あるでしょ。もう」
そう言いながら、彼女は笑った。
「ほんとはね、一人で少しここを離れてみたいって思っていたの。わがまま言ってる自覚もあるけど…駄目かな」
「アリア…」
そういわれて、ヤジマは答えに詰まる。彼女が新しいプロジェクトのことで悩んでいるのをしっているが、どうにもできなかった。ここを離れることが、少しでも気分転換になれば…。
「わかった。行ってきなさい。俺が許可するよ」
「ほんと？」
「ただし、朝と晩には連絡を入れること。わかった？」
「ええ。早速準備してくるね」
そう言って、アリアは研究室へと走って行った。

「ドクター・ヤジマ。もうすぐ夜よ。周りは本当に廃墟ばかりでびっくりしたわ。人は見かけなかったけど、この辺に住んでいないだけかな」
アリアから最初の通信が入った。昼過ぎにドーム・ファラクをでたエア・カーは順調にドーム・ラーストに向っている。

「まだ、ドーム・ファラクに近いからね。もうちょっと居住区は先だと思うよ。まぁ、エア・カーの通り道には近くないけどね」
「そうなんだ。ちょっと残念」
「まさかと思うけど、外には出ちゃだめだからね。アリアのようなドーム育ちには、外は危険なんだ。君に何かあったら、俺はクドウに殺されるよ」
クドウという言葉に、彼女の表情に陰りが浮かぶ。
「…そうね。じゃあ、おやすみなさい。ドクター・ヤジマ」
「ああ、おやすみ、アリア」
通信が切れ、ヤジマはため息をついた。自分の不用意な言葉で、クドウのことを思い出させてしまった。気にしなければいけないほど、クドウと自分とアリアの関係は日常になっていたのに、どこで間違ったのだろう。

翌朝、アリアからの通信が入った。
「おはよう、ドクター・ヤジマ。朝日を見たよ。ドーム・ファラクから見るのとは違った感じがするのは気のせいかな？」
「ここからはエア・カーのガラスよりも厚いガラスを挟んでみるわけだから、だいぶ違って見えるだろうね」
「もう、ロマンがないわね、ドクター・ヤジマは」
そういって、彼女は苦笑する。
「それじゃあ、また夜に」
通信が切れたと同時に、殺気立ったクドウが医務室へとやってきた。
「ヤジマ、これはいったいどういうことだ」
「何がさ」
「『K-A』がドーム・ラーストに行く許可はしてない」
「禁止とも言ってないだろ」
「だが…」
「クドウ、どうしてそんなに慌てているんだ。あれだけ放置して

いたくせに、いまさら大事ぶってどうする？」
いつもは人当たりの良い柔らかい表情のヤジマからは想像もつかないほど冷たい笑みを浮かべてクドウの言葉をさえぎった。

二人の間を沈黙が支配する。それを破ったのは、電子音だった。普段は使われない緊急用のチャンネルだった。
「ドクター・ヤジマ、大変です」
聞こえてきた声は、一般研究室の研究員だった。
「あー、こっちも今大変なんだよね」
「冗談言ってる場合じゃないんですよ。アリアが乗ったエア・カーが、無人輸送機と正面衝突したらしいんです。しかも爆発炎上とかいってて…」

事故の知らせに二人に動揺が走る。
二人はすぐに事故現場へと向かった。

9，戦利品？

ファラクの西で事故がおきた。エア・カーと無人輸送機の衝突事故だった。何度か小さい爆発もあり、いまだに煙が上がり機体は無残に散らばっていた。その近くに人影があった。

事故現場はスラムの住人にとっては宝の山だ。壊れずに残っているものを集め、売買するのだ。取り扱うものは機械から人まで、利用できるものは何でも利用する。それがスラムのルールである。

事故が起きてすぐのためか、今は数人の少年達がいるだけだった。

「なにか役に立つものはあった？」

眼鏡をかけた少年がもう一人に声をかけた。年の頃は１７歳くらいだろうか、髪の色は黒色で、スラムにしては育ちのよさそうな顔をしている。

声をかけられた相手も同じ年頃で、髪と目の色が明るい茶色、猫のような目と右頬に二つの黒子が印象的な少年だった。

「そーだなぁ」

壊れてない部品や荷物などあるものの、猫目の少年の興味を満たすものは見つからないようだった。

「あ…」

猫目の少年が何かを見つけた。視線の先に血まみれの人が倒れている。エア・カーに乗っていたのだろうか、あちこちに血がにじんでいた。

少年が近づき触れてみると、まだ脈があった。血はほとんど止まっているようで、事故のショックで意識を失っていた。

「何してんのさ、ケイ」

眼鏡の少年が眉をひそめる。

「連れて行ってもいいかな」

猫目の少年が触れているのは長い黒髪の少女だった。年齢は自分たちと同じくらいか、雀斑が幼さを出しもしかしたら年下だろうか

と思わせる。眼鏡の少年も近付き、少女に触れる。
「傷の程度で言うなら、僕の治療範囲内かな。まぁ、内臓とか頭とかに問題があったら無理だけどさ。それに、駄目っていったって連れて行くんでしょ？お前がリーダなんだから好きにすれば」
呆れたように返せば、ケイはにやりと笑う。
「そう言ってもらえると思った。ほんとヒロはいいやつだよな」
ケイは気を失っている少女を自分の外套でくるみ、全体を隠して抱き上げた。
「さてと。指揮を移して帰りますか。トシ、トーシ、」
ケイ声に後方から、やや幼さが残る少年が現れる。
「犬みたく呼ぶなって言ってるだろ、って、なにもってんのさ」
「俺の戦利品。これ持ってヒロと一緒に先に帰るから、あとの指揮よろしく。そろそろほかのチームとかドームの警備隊とかくるだろうし、こっちも本格的に爆発しそうだから、臨機応変に適当にやって戻ってこいよ」
「へいへい了解しました、リーダー様」
そういって、トシは肩をすくめた。

ホームに戻り、彼女の治療を開始する。
いきなり衣服を脱がし始めるヒロにケイは動揺した。
「何焦ってるの、治療だよ、治療。まず全身の傷をみないと解らないだろ？」
手際よく衣服を脱がして、傷の程度を確認していく。
「打ち身はひどいけど骨は折れていなさそう、出血も落ち着いているのかな。…これ、なんだろう」
左手首のブレスレットを外すと『K-A』とい文字が現れた。
「『K-A（ケイエイ）』？なにかの記号か？」
「普通ならつけるものじゃないと思うよ。ドームの人間だし。奴隷とかそういう扱いなのかな」
「それにしては、身綺麗だけどな」

一通り治療を終えて、質素なワンピースを着えさせる。
「そういえば、コトが言ってたけど、この事故のことがニュースになってたらしい。ドーム・ファラクの研究所のスタッフが乗っていたそうだ。たぶん、この子だと思うけど、どうするつもり？」
「どうしようかねぇ」
そう言いながら、ケイはまだ意識が戻らない少女の頬を撫でた。

10，まさか、親切な人が助けてくれただけって思ってないよね？

アリアが目を開くと見慣れない天井が見えた。古くて、汚くて、知らない天井。

ゆっくりと身体を起こすと、全身に痛みが走ったが、動けないほどではない。ベットの上に座り直し全身を確認をする。切り傷、打ち身は全身にあるが重傷ではないし、骨にも異常はないようだ。ただ、怪我のせいか身体が熱っぽい感じがする。ふと、左の手首をみるとブレスレットが外されて、記号があらわになっていた。

アリアはどうしてここにいるかを思い出そうとする。

確か自分は、ドーム・ラーストに向っていたはずだ。朝の通信を終えて、しばらくして前からくるエア・カーに突っ込まれたんだ。どうにかエア・カーから脱出できたけど、その後に起こった爆発に巻き込まれて…。

じゃあ、ここはどこなの？

ドーム・ファラクやドーム・ラーストから救助が来た？いえ、それにしてはここは病室らしくないし、そもそも私が普通の病室にいるわけない。だとすると、スラムの住人に助けられた？見ず知らずの私を？そんなことするのかしら。

可能性として、私がドームの人間だから謝礼を期待して保護したか、私自身を売るためにとか…最悪、臓器だけっていう残念な結果もあるわね。どうすれば、最悪の結果を免れるかしら…。

「起き上がって大丈夫かい」

いきなり声をかけられて、アリアは声の方向に顔を向けた。そこには眼鏡をかけた少年と猫目の少年が立っていた。

「事故現場で君を見つけて、ここに連れてきたんだ。どう？身体の

調子は。診た感じひどくはないと思ったけど、少し熱っぽいかな。それから、傷だらけだったし悪いと思ったけど着替えさせてもらったよ」
眼鏡をかけた少年が説明する。よく見ると、簡素な服に変わっていた。
「見た？」
「え？」
「みたよね」
「あ、うん、見たけど、もうちょっとあるといいよね、胸…」
「そっちじゃないっ」
言い切らないうちに、彼女は手元にあった枕を投げていた。顔面に当てるつもりだったが軽くかわされ、枕は何もない空間におちた。
「元気そうじゃないか」
そういったのは、猫目の少年だった。
「うん、大丈夫かと思うよ。だけど、あまり長い時間はやめたほうがいいね」
「んじゃ、起きたばかりで悪いんだけど、いくつか質問に答えてもらおうかな」
猫目の少年がアリアのベットに腰かけた。
「名前は？」
「…アリア」
そう答えると、猫目の初年はちらりと眼鏡の少年に視線を向けた。
「俺はケイ、あっちの眼鏡がヒロ。で、アリア、君はドームの人間だな」
その質問には答えずに、違うことを告げる。
「ここの…ここのチームリーダーに会わせて欲しい」
「なぜ？」
「取引をしたい」

「ふぅん。じゃあ、どうぞ」
「だから、リーダーに…」
「俺が、ここのリーダーだよ」
ケイの言葉に近くに立っていたヒロも頷いた。
アリアは信じられないといった表情をするも一つ深呼吸をして、ピアスの片方を外した。
「このピアスは『ルビー』で出来ている。もちろん、レプリカではなく本物。これと引き換えに、傷が治るまでここにいさせて欲しい」
アリアの言葉に、ケイは楽しそうに目を細める。
「どこから来たのかわからない人間を、簡単にここにいさせると思う？ってか、取引って言うけどさ、そもそも、君がなぜここにいるんだと思う？気を失っている君からピアスを取らなかったのは何故？」
そう言いながら、ケイはアリアの髪の毛を一房持って口付る。
「まさか、親切な人が助けてくれただけって思ってないよね」
ケイの言葉にアリアは息をのんだ。ここはスラムということを自覚させられる。
髪の毛が掌から零れ落ち、ケイはそのままアリアの頬に触れる。
「自分の立場を理解している？」
くすくすと笑う少年に、アリアは眉をひそめた。
「…よ」
「なに？」
「気安く触るなっていったのよ」
思いっきり、その手を叩き落とした。
「黙ってきいてれば上から目線で偉そうなこと言って、ふざけ…」
そのまま、ベットから立ち上がろうとしてアリアの視界が暗転した。

マズイ…

そう思ったのを最後に、アリアの意識は途切れた。

１１，だけど、今度こそ守りたいんだ

事故の知らせを聞いたクドウ達はすぐにエア・カーで現場に向った。

車内でクドウは無言のまま座っていたが、ヤジマはパソコンのキーを忙しなく叩き、事故の情報を集めていた。

しかし警備隊から聞いた以上の情報はなく、アリアの安否を確認できるものも見つからなかった。

彼らが事故現場に着いたのは連絡を受けた翌日。ちょうど、ドームの警備隊の現場検証が行われている最中だった。

クドウらは責任者を探し事故状況を問いただし、彼とともに事故現場で説明を聞くことにした。

「ドーム・ラーストからきた無人輸送機が、ドーム・ファラクから来たエア・カーと正面衝突したようです。正確なことは解ってはいませんが、おそらく無人輸送機のプログラムエラーで、エア・カーの進行方向に向っていったと思われます。我々が到着した時には、機体はほとんど燃えていましたが、スラムの住人によると、衝突後しばらくは小さな爆発が何度かあり、そのうち引火して大きな爆発、炎上したようです。輸送機などに乗っていた物資も持ち出せたようですが、人がいたという話は聞いていません。ただ、爆発前に血痕を見かけたという者がおりましたが、場所の確定は困難でこちらは確認が取れませんでした」

そういって、焦げ付いた現場をあるき、アリアの痕跡を探すも二人に見つけることはできなかった。

帰りのエア・カー中ではお互い無言だった。

「『Ｐｒｏｊｅｃｔ　ＲＥ－ＢＩＲＴＨ』は、『Ｋ－Ａ』…ア

リアの欠陥を修正するための計画だったんだ」
ポツリとクドウが呟いた。
「アリアの致命的な欠陥は、短命であるということなんだ。何度計算しても、ガラスケースを出てから5年くらいで寿命が尽きてしまうんだ。だから、新しいホムンクルスをつくり、そのデーターをもとにアリアを創りなおそうとしてた。突き放したのは、アリアと向かい合うと、どうしていいかわからなくなってしまうから。一緒にいる時間を少なくしてしまったんだ」
「それは、本当なのか。このことは、アリアは…」
「それは、知らないよ。前にも言ったとおり俺の頭にしかないデータだからね。でも、もう、すべてが無駄になってしまった…。アリアはいなくなってしまったんだ」
「でも、もしかしたらアリアは生きているかもしれないだろ」
「そうだろうか」
「血痕があったが人はいなかったっていうことは、誰かに救出されたかもしれない…」
そういって、ヤジマは言葉をきる。
爆発前に救助されたとして、スラムにおける人助け行為を期待するのは難しい。人身売買、臓器売買…それらの可能性も高いからだ。しかも、事故現場に向かう途中にもそのルートの確認を行ったが、収穫はゼロだった。
「…じゃあ、アリアが帰ってきても大丈夫なように、研究を進めなくてはいけないね」
クドウは微笑んだ。その表情にヤジマは違和感があったが、それ以上追及はしなかった。

ドーム・ファラクに戻ってから、クドウはさらに研究に没頭していくようになった。
そのどこか壊れてしまったような親友の姿に、ヤジマはどうしようもない気持ちを抱えるも、対処できない自分に失望していた。

「アリアが見つかれば、落ち着くのだろうか」
そうつぶやきながら、ヤジマはあるメールアドレスを入力する。
そこは、どんな情報でも望むものが得られる情報屋のものであるが、その情報屋のサイトで厳しい審査を通らねばならず、一度メールアドレスが得られたからと言って、次も使用できるとは限らないところだった。
しかも、情報屋がどこで何をしているのか、性別年齢すべてが謎に包まれているのだ。
『ドーム・ラーストとドーム・ファラクの間で起きたエア・カーと無人輸送機の事故に巻き込まれた、黒髪、黒目の17歳くらいの少女を探している。雀斑があり、ルビーのピアスをしている。彼女に関した情報が欲しい』
本文を入力し、送信ボタンを送る。
エラーメッセージが帰ってくることもなく、ヤジマは大きくため息をついた。
「まさか、まだ使えるとはな。都合のいいやつと思われてもいい。だけど、今度こそ守りたいんだ」
彼の祈りはまだ届かない。

12，なんであんなに可愛いの。反則よ、反則

「あの事故のあとで、いきなり動くとか無理に決まってるじゃんね、って聞いてる？ケイ」

立ち上がろうとしたアリアを抱きとめようとして、一緒に床に倒れてしまったケイにヒロが笑いながら話かける。

「笑ってないで助けろよ」

「いや、だって、面白いでしょ。君の態度とかさ。それに、彼女慣れてない猫みたいで全身の毛を立てて可愛いし」

「俺のだからな」

そう言いながら、ケイはアリアを抱き上げてベットに乗せた。

「わかってるよ。で、これからだけど、怪我もしてるし、打ち身と事故のショックとか色々あって熱がでるだろうね。君もずっと一緒にいれるわけじゃないから…」

「え、一緒にいちゃダメか？」

「駄目に決まってんだろ。あんたはバカでもリーダーなんだからな。だから、看病はスミに頼んでおくよ」

しばらくして、アリアのいる部屋の扉が開き、肩までの巻き毛の茶髪の少女が入ってきた。

「頼みがあるって、なんなのよ…って、女の子？？」

ベットに寝ている少女をみて驚きの表情をする。それに対して、ヒロは人差し指を唇の前にたてた。

「しばらくこの女の子の世話をして欲しいんだ。もちろん、他のみんなには内緒でね」

「いいけど、ヤバいことしてないわよね」

「たぶんね」

「たぶん、ね。で、どんな状況なの」

「事故にあって、怪我をしている。骨は折れてないし、多分内

臓関係も平気じゃないかと思う。ただ、打ち身と怪我のショックで発熱を起こしてる…ってとこかな」
「わかったわ。薬と食事の世話をすればいいのね。何かあったら連絡するわ」
「ありがとう」
そういって、彼女たちを残してヒロは部屋を出て行った。

アリアは身体が怠く、熱を感じながら、ゆっくりと目を開き、薄汚れた天井をみた。
「あ、れ？」
どこかで見たことがある気がするが思い出せず、ぼーっとした頭で周囲をみると、茶髪の少女が目に入った。
スミはアリアが目覚めたことに気が付くと、ベットサイドに座って優しく話しかけた。
「目が覚めたみたいね。薬を飲める？」
ゆっくりと首を振る。
「苦いから嫌だっていうの我儘はだめよ」
「違う。たぶん、あわない」
「んー、アレルギーなら仕方ないわね。じゃあ、水だけでも飲んで。ほんとはご飯も食べてほしいけど」
「ごはんいらない」
ふるふると首を振る。
「わかったわ。次起きたらご飯を食べようね。さ、水飲もうか」
アリアは上半身を起こして、水を受け取った。
「ありがとう」
ふわりと柔らかな笑みをスミに返して、水を飲みほして再び眠りに落ち、その表情をみたスミは、なんとも言えない表情をしていた

バタン。
ヒロの部屋の扉が勢いよく開かれた。

「うるさ…」
言いかけた言葉を、遮るようにスミがしゃべりだす。
「あの子なんなの。なんであんなに可愛いの。反則よ、反則。ってか、どこから誘拐してきたのよ」
「おちつけ、スミ」
「落ち着いてられますか」
「実は事故現場から拾ってきました」
降参のポーズをとる。その態度に、スミは眉をひそめる。
「ほんとに？」
「ほんとに」
「でも、あのこドームの子でしょ。肌も髪もきれいだし、すれてなかったもの。本当に大丈夫なの？」
「大丈夫じゃないの？ケイが気に入っちゃってるんだから仕方ないでしょ」
そういって、肩をすくめた。

13、なんとなくムカついて

意識が浮かび上がり目を覚ます。前よりすっきりと目覚め、アリアは上半身を起こして周りを見回し、ベットの隣の椅子に座ったケイと目があった。

「だいぶ良くなったようだな」

アリアに近づき、額に手を当てる。

「あー…」

「忘れていないとはおもうけど、倒れたんだよ。しかも、俺の上に。まったく、あれだけの事故にあって怪我しているんだから動けるわけがない」

「それは、その…なんとなくムカついたから。それに、やられるにせよ、売られるにせよ一発殴っておけば気が済むかなぁとおもって」

素直な答えに、ケイは苦笑を浮かべる。

「自分の置かれている状況を把握できてないやつは、ここでは生きていけない。お前はドームの人間だろ？」

アリアは言葉を返さない。

「気が付いていないかもしれないけど、スラムでは2文字の名前で呼び合っているんだ。だから、アリアと3文字で名乗った時点でアウトさ。なあ、アリア。どうして、ここで治療したいと言い出すんだ？ドームに帰れば適切な治療が受けられるだろ」

「私をどうかするんでしょ？」

アリアはケイから視線を逸らさずに答える。その言葉にケイは首を振る。

「あれは冗談。ほんとは事故現場でお前を見つけて、気になって連れてきたんだ」

「それだけ？」

「ああ。まさか、こんなじゃじゃ馬とは思わなかったけどね」

ケイは肩をすくめる。
「悪かったわね」
「悪くはないさ。で、さっきの話だ。どうして、ここにいたい？」
改めて聞かれて、アリアは瞳を閉じて深呼吸をする。そして、まっすぐにケイの瞳を見つめた。
「…戻りたくないの。あそこはとても優しい場所だったけど、もう、私の楽園じゃなくなってしまったからいたくないの。勝手なことを言っているのはわかってる。だから、怪我がよくなるまでいいから、ここにいさせて欲しいの」
「それは、手首の文字も関係していることか？」
ケイの言葉に、アリアは手首を押さえた。
「わかったこれ以上聞かない。代金もうけとったし、しばらく居るといい。その間にここで生きる方法でも考えればいいさ」
ケイは自分の左耳を指した。そこには先ほどの取引に使用したルビーが光っていた。
「再度自己紹介しておく。俺は『ウェスト』のリーダーのケイ」
ケイの言葉に、アリアは首をかしげた。
「え、俺なんか変なことといったか？」
「いま、『ウェストのリーダー』って言わなかった？」
「いったけど」
アリアは動揺していた。彼女の頭の中にスラムに関する文章が浮かぶ。
『ドーム・ファラクを中心にスラムは東西南北に４つの地域に分かれている。大小様々なチームと呼ばれる集団が存在し、そのなかでトップを極めたチームがその地区の名前を冠することができる。北地区の『ノース』、南地区の『サウス』、東地区の『イースト』、西地区の『ウェスト』…』
彼女が事故を起こしたのは、ドーム・ファラクの西側。チームで言えば…。
「ウェストって言ったら、西地区のトップじゃない」

「そうだよ。人間やればできるもんだね」
「そんなラッキーでトップが取れるはずがないでしょ。でも、西地区のトップがこんなに若いとは持っていなかったわ」
「まあね。スラム最年少のトップみたいだから、俺が特別じゃないかな」
あまり興味がなさそうに答える。
「そんなことより、これからよろしくな、アリア」
そういって、ケイは右手を差し出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0234x/

8番目の罪

2011年11月23日23時55分発行